



判すべき問題点も含んでいるが、長所もあるから「それ」  
れまで活用されてきたのであり、とくに「ある部分に  
ついてのその出来具合を誰にでも伝えられ、しかも対  
象に差異をつけることができる」とことは重要である。そ  
の典型例が「入学試験」や「定期試験」などのペーパー  
テストで、それは点数化されて示されるため、差異が  
つき、「選別・選抜」の公平さを保証する。「この点が「評定」  
の最も欠かせない条件である。

（本来の評価とはどういうものか）

では「評定」本来のものの「狭義の評価」とは何を指  
すのだろうか。簡単に言えば、本来の「評価」はすべ  
く「自己評価」である。つまり「活動者がある目的をも  
って活動したとき、果たしてその効果がどれほどのもの  
であったのかを、目的に照らして調べる情報収集のこと」  
である。「このことを「評価」と「評定」の区別をした績有  
恒は活動者自身のフィードバック活動」と表現した績有  
恒「教育評価」第一法規、一九六九年。

「この大切なことは「評定」が第三者によるものであ  
るのに対し、「評価」は活動者自身によるものだといっ  
て違っている。では活動者自身は何のためにフィードバック  
情報が必要とするのかと言えば、それは活動そのもの  
効果的な遂行達成「のためである。より明確に言え  
ば「活動を点検・評価して、悪い部分があったら修  
正・改善し、目的達成を確実に成就する」ためであ  
る。

（測定とは何か）

最後に「整理のため」に「わかりにくいもの」にする「測  
定」と「同じもの」について「測定」とは「計  
る量」を測る「こと」であり、「一定の基準を立てて、それ  
をまとめる」ことも分ける。「分類」する「こと」であるとい  
言っている。「は」は「わかる」と「一字違」の「こと」  
「わかる」は「わかる」と意味上大変関係の深い「こと」だ  
と述べている。学者も「この意味」を「高田誠一氏」が「そこ  
で「評価」も「測定」と異なるのは「値打ちを」つけな  
い「こと」である。そして「この」が「例えば」「固  
定」「評価」「測り」「色」「色」「色」など、その  
それぞれが「標準」の中「より」固「より」固「より」短「か  
ら」より「赤」から「青」など「この」値「つけ」、値「打

ちを定める」とはしないといっている。どれが値  
打ちがあるかは、目的によって異なるので、その目的の  
違いに応じて何を選ぶかを予め決めやすくしておく、  
といふ無色透明な作業をすることが測定であるとい  
つてよい。まとめておくと、「測定」は「分類」をするため  
「評定」は「序列化・選抜」をするため、「評価」は「修正・  
改善」のためであり、「この使い分けを明確にする」ことが、  
もっと常識化され、とくに教育界ではこれまで「いまい  
であったので弊害も大きかった」ことを反省し、「この区別  
が現場で徹底しなければならぬ」。ジャーナリズムの責  
任も大きく、学力調査などの目的が何であるのかによっ  
て、報道上の用語法に十分留意し、丁寧な表現や説明  
がなされねばならない。

三、子どもの「何を」評価するのか

「評価」の具体的な場面での問題の一つは、「何を」対  
象にした評価なのかといふ点がある。考えてみれば、子  
どもの「学習全体」とか「人格全体」とかを対象に  
するなどということとは不可能であり、大それたこと  
であるのに、つい「つかり」と眼前のテストの得点を  
見ると、それを絶対視して教師も保護者も、子ども  
も本人も議論しがちである。これは絶対にしてはな  
らないこととして、必ず相互に確認した上で議論を始  
めなければならぬ。

例えば、体育などの場合は、比較的この種の危険は  
避けることが出来るはずである。なぜなら、種別に子  
どもの評価をするのが普通であり、種別に「よ」子ども  
の能力の伸び方が異なることが多いからである。しか  
し、それでも「い」が「留意」しなければならぬ「こと」がある。  
体育の場合、種々の学習成果を数字で量的に表現でき  
る「こと」が多い。速さ、高さ、遠さ、回数、得点、その他、  
運動能力を示す数量的な手掛りが明確だからであり、  
心理的な内部の「こと」も外部の行動に出なければ意味が  
ないからである。

ところが、やはり子どもには得意、不得意、好き、嫌  
いなどがあり、決してすべての種目に「万遍なく」よ「こと」か  
悪「こと」か「子ども」は「少ない」。そして、基本的には、種  
目別の評価を出してあげることが望ましく、それを  
複数種目の平均値で示すことは最小限、と「い」して  
も、そうしなくてはならない場合以外はやめた方がよい。



提にした妬みや嫌み、不信感をもって自分と区別する  
とともに「できる子」の方の「できない子」を見る目も  
何のためらいもなく軽蔑と決めつけで一段見下げる態  
度が強まってきている。人間として、それぞれによいも  
のをもち、どんな者でも平等な価値ある存在だとの  
「人間としての尊厳」を認めない風潮が強まっている。  
る。

第二は、「評価」の究極の意味を、「どの子も一  
層成長させるため」のものとしてとらえ、そのため  
に指導や学習の活動の修正・改善を図るものだ、と  
いう常識を少しでも早く教育界、一般社会に定着さ  
せたいと思う。それには「評価」が「評定」であつても、  
教師や子ども一人一人の指導や学習の活動の意欲  
を増進させるもの、そのよくな内実をもつものにならな  
ければならない。単に序列化して意欲を奪うようなこ  
とをやめ、到達目標への到達度の向上に目をとめ、  
他と比べることなく(仮に比入ても)、意欲を湧き起  
こすようにする工夫が必要である。もちろん、だから  
とじて甘く評価をしてよいことにはなく、客観的な  
評価を心がけつつ、少しずつでもそれを活用して学  
習成果を上げられたら、それをみなで共に喜び合い、  
さらに力づけ合うという「評価」活動に変えていく  
べきであらう。

(あびただけに)